

# カフカの『判決』における仮面の交換（Ⅰ）

## — 作品内在的解釈と精神分析的解釈 —

河 中 正 彦

ここでは作者が言葉を、読者が意味を提供する。

— リヒテンベルク

### Ⅰ) 研究史の総括と解釈の方向

この論文の目指すところは、『判決』に関する従来の研究史をいくつかの典型的な方法に分類し、なおかつそれらの関係を、相互に翻訳可能な関係にあるものとして捉えることにある。もしそれが可能なら、統一的視点から研究史を一貫した過程として把握することができよう。それらの方法は、まず「伝記的・作品内在的」な方法、第二に「精神分析的」な方法、第三に「宗教的」な方法に分類できる。

1) 「伝記的・作品内在的」な方法は、ケイト・フローレスやエリック・マーソンに代表される。彼らは『判決』の三人の登場人物、「ゲオルク・ロシアの友人・ゲオルクの父」をそれぞれ、市民としてのカフカ・作家としてのカフカ・カフカの父ヘルマンに対応させて (Flores 15-17, Marson 167. 数字は頁。文献は論文末尾参照)、作品を分析する。

2) 「精神分析的」な方法は、ルース・ティーフェンブランやライナー・カオスに代表される。彼らはこの三人を、自我・エス・超自我と解釈する (Tiefenbrunn 94, Kaus 39)。この変種は幾つもあって、アッシャーはゲオルクをエスとし、ロシアの友人を自我としている (Asher 41)。またゾーケルは、ゲオルクを「前面の自我」、ロシアの友人を「純粹な自我」、父を「圧倒的な権力」 (Sokel I 45, 48) としているが、精神分析的な方法の一種であることに変わりはない。カフカの『判決』は一九一二年に成立し、フロイトが第二局所論 (自我・エス・超自我) を初めて導入したのは一九二三年の「自我とエス」である。確かにカフカはすでに一九一二年にフロイトの第二局所論に近い自己了解に達していたようにみえるとしても、一九一二年のカフカが、フロイトの第二局所論の影響を受けた可能性はありえないのだから、カフカ研究はカフカが

どのような過程を経てそこに到達したかを提示できなければならないだろう。

3) 「宗教的」な方法はスタインパークやヴォルフ＝ダニエル・ハルトヴィッヒが代表する。彼らは『判決』がユダヤ教の祝祭日ヨム・キップル（贖罪日）に書かれたことを重視し、ユダヤ教の立場から父を神と解釈する。スタインパークは、家の北側の部屋にいる父を、「ユダヤ教会の神」（Steinberg 26）と捉えている。ハルトヴィッヒは、ゲオルクを西欧に同化した「西方ユダヤ人」、ロシアの友人を「東方ユダヤ人」のアレゴリーとし、ゲオルクへの溺死の刑を、「永遠なる本質を忘却した人間の時間性のなかへの没落」（Hartwich 534）と解釈して、旧約聖書でユダヤ人の男の子がファラオに溺死させられた事実と重ねあわせる。

一九一二年のカフカが、フロイトの第二局所論の影響を受けた可能性はありえない。従って私たちはまず「伝記的・作品内在的」と呼び慣わされてきた方法を辿って、それが精神分析的な方法や宗教的な方法と、最終的に転義的な関係にあることを証明したい。

## II) カフカの自己注解

カフカは『判決』に〈意味〉を否定し、その代わりに〈真実〉を要請した。フェリーツェ・パウアーへの手紙でカフカは、「あなたは『判決』になにか意味が見つかりますか？私が言っているのは、率直な、筋の通った、辿りうる意味です。私にはそれが見つからず、なにひとつ説明できません」（F 394）と述べている。カフカの言う「無意味」とは、『判決』が書かれている言葉の意味に大きな地滑りが起きており、それ自身が本来指すはずの意味とまったく重なり合うことない、ということである。たとえば「友人」は友人ではなく、「父」もまた父ではない。したがって言語の一義性を信じて読み進むと、意味が辿れなくなる。

カフカはさらに「『判決』はすこし荒々しく、無意味で、『判決』にもし内的な真実（これは普遍的に確認されるものではなくて、各々の読み手や聞き手によってあらためて認めたり、否認したりされねばなりません）がなければ、なにもものでもないでしょう。」（F 156）とも述べている。カフカが受容者へ要請しているのは、作品を「意味の次元」に還元し、引きおろすのではなく、その彼岸にある「内的な真実」を承認、あるいは否認してほしいということであっ

た。カフカは矛盾とも見えかねない<意味>と<真実>のこの微妙な差異化によって、『判決』がふたつの次元をもつことを示唆しているのだ。

これらの次元をハイデガーなら「存在的」と「存在論的」と呼び分けるだろうし、ラカンなら「想像的次元」と「象徴的次元」（真理の次元）と呼ぶであろう。ハイデガーは伝統的に「知性と事物の一致」（SZ 214）と考えられてきた真理概念を転倒し、真理を「存在者を秘匿性から取り出しつつ、非秘匿性において見させる」（SZ 219）ことに、つまり真理を暴露されるものとして規定した。この「アレーティア（非秘匿性）」として真理を構想する真理概念を、ラカンは精神分析のなかに導入した（É 21）。ラカンは「この無意味の部分こそが主体の実現において、無意識を構成するまさにそのものなのです。」（Sé XI 192）と言う。解釈はラカンにとっては、「意味を目指すというより、シニフィアンを、その無意味に還元することを目指す」（Sé XI 192）のである。カフカが「内的真実」というとき、それは構成された無意識、実現された主体のことを指している。だから例えばユルゲン・デンマーが「自己正当化と自己告発のあいだで揺れ動く人間の玉虫色の証言」（Demmer 200）に苛立ち、何かが言われるとき「同時にその反対が一緒に言われるならば、彼の言うことは実際には何も言っていない、無意味なのだ」（Demmer 201）と絶望してしまうのは、早計であろう。『判決』には「率直な、筋の通った、辿りうる意味」はない。だがまさにこの無意味の中にこそ「内的な真実」の現れうる条件と余地があるのだ。

『判決』は説明できません。もしかするとあなたにいつか『判決』についての日記の箇所をいつかお見せするかもしれません。この物語は抽象だらけで、しかもそれらは告白されていないのです。友人はほとんど現実の人物ではなく、むしろ父とゲオルクに共通のものかもしれません。話は父と息子のまわりを一巡することかもしれないし、友人の姿が変化するのは、父と息子の関係のパースペクティヴ交替かもしれないのです。それについても私は確信がもてません。（F 396—7）

説明できないといいつつも、カフカはここで一方の次元を別の次元にモード変換（modifizieren）するための重要な示唆を与えている。示唆とは、『判決』には「告白されていない抽象」で満ちているということであり、ゲオルクの幼友

達である「ペテルブルクの友人」を、現実の人物と誤解しないようにという警告である。「友人」はむしろ「父とゲオルクに共通のもの」かもしれない、とカフカは暗示する。この「共通のもの」は、カフカがフェリーツェ・パウアーにいつかみせると予告した「日記の箇所」でキーワードとなる概念である。まずカフカが『日記』に認めたその箇所を参照してみる。

(1) 友人(注一ペテルブルクの友人)は父と息子を結ぶもの、彼らの最大の共通性である。自分の部屋の窓際に一人座ってゲオルクはこの共通なものを官能的な悦楽を覚えながら、ほじくり返し(wühlen)、父を自分の中に持っていると感じて、ちょっとした悲しい憂慮すべきことを除いては、すべてを平穏だと思っている。

(2) さて話の展開は、この共通なもの、友人から父が立ち上ってきて、その父がゲオルクにたいして、他のよりささいな共通性、すなわち母への愛や愛着、母への誠実な思い出や、元来は父が店のために獲得した顧客などの共通性によって力づけられて、対立項として配置される様を示している。

(3) ゲオルクはなにひとつ持っていない。話のなかでは友人との関係、だから共通なものへの関係を通じてのみ生きている婚約者は、結婚式がまだなので、父と息子のあいだを巡っている血液循環のなかに入れず、父によってあっさり追い払われてしまう。

(4) 共通なものはすべて父のまわりに山積みされ、ゲオルクはそれを自分とは無関係(疎遠)なもの、自立したもの、自分によって一度も守られたことのないもの、ロシア革命に曝されたもの、と感じている。そしてゲオルク自身は、父への眼差し以外にはもはやなにひとつ持っていないというただその理由で、父をゲオルクにとって閉ざす判決は、かくも強烈にゲオルクに作用するのである。(T 491—492 段落数字は引用者による)

この自己注解はカフカ研究者たちのあいだで極めて評判がわるい。ハインツ・ポリツァーは、「さしあたって注釈者は、物語が基づいている根本的關係を隠蔽し、纏れさせることにベストを尽くしている」(Politzer 101)と述べ、それ以降まともな解析を加えていない。カルステン・シュリングマンは、なんらの分析なしに、「『判決』は、その著者による単純化する解釈から保護されねばならない」などと大見得を切っている(Schlingmann 76—80)が、彼じしんは、



父が企業家として案外に有能な息子に嫉妬して死刑の判決を下すという、これこそ単純化以外のなにものでもない「解釈」を対置している。インゴ・ザイトラーは「カフカの自注はテキストの本来の解釈にわずかなものしか提供してくれないし、確定してくれない」(Seidler 181)と述べ、ベハリエルもそれに同調している(Beharriell 32)。ゲアハルト・ノイマンは全文引用している(Neumann 43)が、「共通なもの」がなにかを特定できていない。ライナー・カオスは「カフカの自己解釈をテキストの代わりにしては、ましてやテキスト以上に扱ってはならない」(Kaus 28)という美名のもとに解釈をまったく放棄している。デンマーはカフカの自注の(2)と(3)の部分しか引用していないし、しかも(3)のもっとも難解な最初の文「ゲオルクはなにひとつ持っていない。」を削除している(Demmer 184)。要するにカフカ研究者たちがカフカの自注を前にして逃げ惑っている。これほど貴重な示唆に満ちた自注を、彼らは明らかにもてあましてしている。私たちはこの自注を「テキスト以上に扱う」のではなく、それを通してテキストを読んでいこうと思う。作家の意図が作品のすべてではないにしても、先ず顧慮さるべきは作家の意図なのだから。カフカが作品に要請する「内的な真実」に迫るにはこの道しかない。

まずカフカの自注でいかにも奇妙な箇所を挙げてみる。「父と息子を結ぶのが友人だ」という表現(なぜならフランツ・カフカと父ヘルマンは水と油のように異質な性格で共通な友人などいるはずがない)、「父を自分の中に持っている」という表現(実際の父の表象を持つためなら、別に「友人」を掘り返すまでもない)、「父が共通なものから立ちのぼる」という表現(現実の父、ヘルマンなら共通なものから立ちのぼる必要はない)、「ゲオルクはなにひとつ持っていない」という表現(父から事業を受け継いだ青年実業家で婚約しているゲオルクが「なにひとつ持っていない」はずがない)、「婚約者が話のなかでは友人との関係、だから共通なものへの関係を通じてのみ生きている」という表現(婚約者フリーダはゲオルクと婚約しているのに、なぜ「友人との関係を通じてのみ生きている」のか?)。これらの奇妙な諸点を矛盾なく説明できるためには、いったい友人は何でなければならないのか?

### Ⅲ) 友人のロシアへの逃亡

すでに引用したように、カフカはロシアの友人を「ほとんど現実の人物では

なく、むしろ父とゲオルクに共通のもの」だと述べている。そしてそれは「抽象」である。しかしいったい何からの抽象なのか？それはカフカという人格全体、「全体自我 Gesamt-Ich」(Freud X 229)からの抽象である。つまり友人は彼の「部分自我 Partial-Ich」(Freud VII 221)だと言える。フロイトは「詩人と空想」(1905)でカフカ作品の本質に不気味なほどに迫る洞察を述べている。

いわゆる心理小説の多くでさらに私の眼を引いたのは、ただ一人の人物、つまり主人公のみが内部から叙述され、詩人はいわばその人物の心のなかに坐って、他の人物たちを外側から見ていることである。心理小説は現代詩人の傾向の特殊性を、自分の自我を自己観察によって幾人かの部分自我に分割し、したがって彼の心的生活の葛藤の流れを幾人かの主人公に人格化している点に負っている。(Freud VII 221)

残酷なまでに正確なフロイトのこの二つの指摘の第一は、カフカ研究史(バイスナー、ヴァルザー、コープスら)がカフカ独自のパースペクティヴ、作家と主人公の視点の一致として語ってきたものであり、第二点は自我の分裂として語ってきたことである。この二つの指摘の第二点を中心に『判決』を見ていくことにしよう。

『判決』はゲオルク・ベンデマンが「ロシアの友人」に自分の婚約を知らせる手紙を書き終えたところで始まっている。このロシアの友人は、ゲオルクの幼友達で、故郷での「前進」への「不満」から、もう何年も前にロシアに「逃げた」のであった。ペテルブルクで始めた「商売」は、はじめのうちこそうまくいっていたが、もうかなり以前から行き詰まっているようである。故郷を訪れる回数もますます減ってきて、黄色い肌の色が、進行する病気を暗示している。彼はペテルブルクの同国人の移住者集団とも、ロシア人とも社交的な交流がなく、「生涯独身で終わる」覚悟をしている。(D 43—4)ゲオルクは最初、この不幸な友人に婚約を知らせることをためらっていた。だが婚約者の気持ちを汲んで、ようやく知らせる決意を固めたのであった。その逡巡の過程が、友人と自分の過去を回想する形式で語られる。この部分が『判決』の最初の三分の一をなしている。

カフカはこのような設定で一体なにが暗示したかったのだろうか？なぜ「友

人」は他ならぬ「ロシア」に「逃げた」のだろうか？『父への手紙』でカフカは、「書くこと」を「自立と逃走」の試みと呼んでいる（N II 211）。極貧から身を起こしてプラハの中心街にファッション店を構えるにいたったカフカの父は、社会的成功者の常として過剰な自信にあふれていた。このような父の「最初の一撃」（N II 146）を長男としてたったひとりで受けとめるには、フランツはあまりに繊細であった。彼は「不機嫌で、不注意で、不従順な子供になり、いつでも逃走に、たいていは内面の逃走に」心を配っていた。（N II 164）『父への手紙』でこの「逃走」は、下半身を父の足にふんづけられ、ちぎれた上半身だけで逃げていく虫に擬らえられている。「私はじじつこの点ではあなたから逃げ去って、少しだけ自立していました。たとえそれが、下半身を足で踏んづけられ、上半身だけもげて脇に逃げていく虫を想わせたとしても、です。」（N II 192）虫の上半身がロシアの友人であり、下半身はゲオルクである。ゲオルクが「共通なもの」を、「自立したもの」（4）と感じているのは、カフカにとって「書くこと」が自立の試みだったからである。

この内面的な「逃走」、内面への逃走は、文学への道を開くものであった。父の重圧から逃れることは、必然的に父の射程の及ぶところからの逃走をも不可避なものにしてしまう。「あなたから逃げようとすれば、私は家族からも、母からさえ逃げなければならなかったのです。（N II-175）」このように家族の共同体から不可避的に閉め出されてしまう孤独をカフカは「ロシア的」と呼んだ。

ひとはこんな夜には、どんなに遥かな旅をしてもこれほどまでには痛切には実現できないほど、完全に家族から脱出してしまっていて、ヨーロッパにとってあまりにも極限的な孤独ゆえに「ロシア的」としか呼べないような体験を持つのである。（T 348）

この「ロシア的孤独」とは、一九〇五年の第一次革命以来「内乱状態」にあったロシアを、フロイトの表現を借りれば「心的生活の葛藤の流れ」の隠喩として表現たものであった。ゲオルクは「共通なもの＝ロシアの友人」を、「ロシア革命に曝されたもの」（自注の4）、つまり「内乱」に曝されたものとして感じている。それは「部分自我」ゲオルクが、もう一人の「部分自我」ロシアの友人（作家としての自己、書くこと）を、婚約という内乱によって危機に瀕した状態に追いやったことに対応している。カフカがフェリーツェに送った最後

の手紙の結びは、「私はカントを知りませんが、その文はおそらく諸民族にのみ該当するもので、市民戦争、＜内なる戦争＞にはまず関係ないでしょう。後者の場合、平和は多分灰に望まれる平和に過ぎないでしょう」(F 759)で終わっている。この染み入るような一節でカフカは、私に関係のあるのは、民族間の戦争（個人と個人の戦い）ではなく、一個人内部の「戦争」であり、この戦争は私が灰になるまで終息することはないと言っているのだ。『判決』の最初の構想は「戦争を記述する」(F 394) ことであった。「若者が窓から多くのひとの群れが橋を渡ってくるのをみているはず」であったが、「それから私の手の下ですべてがグルッと回転したのです。」(F 394) 回転はしたが、新しいヴァージョンでも「戦争」、内乱が描かれていることに変わりはない。これらすべてから、友人が逃げていく先は「ロシア」でなければならなかったことが納得されよう。

友人がロシアに逃げたという設定は、カフカの内部の戦いに由因する内向と孤独を含意している。この「友人」を性格付けているのは、「禁欲」、「孤独」、「独身」、「蹉跌」などの属性である。この「友人」のイメージが、カフカが描いた自画像に酷似していることにいち早く気づいて、『判決』研究史に本質的な洞察をもたらしたのは、ケート・フローレスであった。「もし外面的な人間ゲオルク・ベンデマンが、外部から見たカフカと同定できるとしたら、ゲオルクの＜ロシアの友人＞は内なる人としてカフカ、彼の作品に描かれたカフカ、特に『日記』のカフカと著しく類似している」(Flores S.12) と彼女は指摘した。また彼女は外部の人と内部の人との対立を、人間としてのカフカと作家としてのカフカとの対立に置き換えている (S.15-16)。『判決』に「ひとつの人格のふたつの側面を別々の人物として描く」(S.14) 工夫を見抜いたのは大きな前進であった。その後のカフカ研究は、多少ともこのフローレスの影響下にある。正面切ってこの同定を否定して見せたのは、ロナルド・スピーアーズの『「判決」あるいは弱さの強さ』である。「友人＝作家という等式を裏づけるものをどこに見出せようか？私が見る限り、友人を芸術や作家活動に結び付けるものは、テキストには何もない。」(Speirs 96) 確かにそれはそうである。しかしテキストに書いてないという点では、彼の推測も同様にテキストに書かれていないばかりでなく、テキストから読み取ることさえ出来ないものである。

結婚や店のきりもりなどの父の役割を引き受けることで、若いときの従属

感を逃れようとする試みは、そのような野心が空しいものだという認識で挫折してしまう。逆説的に言うなら、老齢による父の弱さこそが、ゲオルクから人生において「進歩」が可能だという錯覚による希望を奪うことによって、父を再び強力にするのである。(Speirs 102)

つまりゲオルクは父の老いた姿を見て、父の役割を奪っても、いずれはこうなるのだと気づいて消耗するから、相対的に父は強くなる、というのだ。テキストにはそんなことは書いてない、そう読める暗示や兆候さえない。しかもこの説明で『判決』の結末のデモーニッシュな父の変容を理解できるだろうか？「友人＝作家という等式」を否定して、さてこの喪失を埋めるだけの論理を彼は提示できなかった。

作家としてのカフカ、つまりカフカが好んで単に「書くこと」と呼んだ作家の活動を「ロシアの友人」と同致するという仮定のもとに私たちカフカの自注を読み直してみる。カフカは『父への手紙』に、「私の書くことは、いつでもあなたのことを問題にしていました。私はあなたの胸で嘆くことができなかったことをそこで嘆いただけです」(N II 192)と告白している。つまり「書くこと」＝ロシアの友人は「父と息子を結ぶもの、彼らの最大の共通性」であるといえる。現世的なものの権化であるような父を日常では避けていたカフカは、「書くこと」を通じてのみ父との関係を保ちえたといえよう。ただしカフカが彼の文学で扱ったのは、ヘルマン・カフカ、つまりフランツの生身の父ではなく、「最後の審級」(N II 149)としての父である。

「何年たっても私は、大男、私の父、最後の審級が、ほとんど理由もなく、ベッドから私をバルコニーに連れ出すのではないかという苦しい妄想に苦しみました。」(N II 149)『父への手紙』でこのようにカフカは幼年期の外傷体験の記憶、水をねだって泣き続け、怒った父に夜のバルコニーに閉出された体験を語っている。そこで彼は、意味もなく水をせがむという幼児には自明のことと、父の恐ろしい罰を「結びつけられなかった」と述べている。

原因と結果を結びつける紐帯の欠如は、因果律によって成立している世界の崩壊を意味する。世界は紐帯を失って、いわば四散してしまったのだ。彼の外傷体験の核をなすものは、バルコニーに連れ出されたという事実ではなく、むしろこの結びつき(Verbindung)の欠如それ自体であった。この結びつきの回復こそカフカにとって生きていくための不可欠要件であった。「たとえ私の自

我のもろもろの部分（注一部分自我）に逆らっても、私が自分で創り出したか、闘いとったのではない結びつきはすべて、無価値であり、私の歩みを妨げ、私はそれを憎んでおり、あるいはほとんど憎みそうになっています。」（F 729= T 806）カフカの「書くこと」は結びつきの欠如を代償しようという試みと考えられる。つまり「ロシアの友人」は「父と息子を結ぶもの、彼らの最大の共通性」なのだ。『判決』はだからある意味ではこの外傷体験の反復・再演なのである。その際「ほとんど理由もなく」という点が肝要である。いくらか先回りになるが、「最後の審級」という表現はフロイトの「超自我」に対応し、「ほとんど理由もなく」という箇所は、『判決』の末尾における父の息子に対する死刑判決に深く関わってくる。

「友人」は「作家カフカ」という抽象、あるいは「書くこと」の隠喩的表現である、という暫定的な答えで「友人とは何か」という問いをひとまず置く。なぜなら『判決』の展開をさらに追わずにはこれ以上進めないからである。

#### IV) ゲオルクの婚約

「友人」は「作家カフカ」、あるいは「書くこと」という仮説から、カフカの自注の「婚約者は話のなかで友人との関係、だから共通なものへの関係を通じてのみ生きている」という表現を捉え返してみる。この注釈が奇怪なのは、フリーダは『判決』のなかで、ゲオルクとの関係においてのみ生きているように書かれているのに、カフカはそれを逆転させていることにある。この矛盾はどう解くべきなのか？

『判決』の成立にとって、フェリーツェ・パウアーとの出会いが、極めて重要であったことは、だれしも認めるところである。一九一二年八月一日プラハのマックス・プロートの家でカフカは彼女と出会った。一週間後の二〇日の『日記』には、この出会いで彼女に「揺るがしがたい判断」を抱いたと記述がなされ、長い逡巡の末九月二〇日に最初の手紙が書かれる。「揺るがしがたい判断」とは、将来生活を共にする人がいるとすれば、この人を措いてほかにないという確信であっただろう。

そしてその二日後に『判決』が一夜にして成立する。ゲオルク・ベンデマンが婚約フリーダ・ブランデンフェルトは、『日記』に残された初稿では、ブランデンブルクとも呼ばれ、「当地のK. B.の娘」という下書きは、「裕福な家庭の娘」と訂正されている。K. B.は、フェリーツェの父カール・パウアーのイニ

シャルとしか読めないことを考えれば、『判決』が私的な動機から書き始められたのは明らかである。しかも作品の舞台は、「当地の」という文言から、プラハではなく、ベルリンだということになる。カフカが『判決』を書いた動機は、これほどまでにきわめて私的な事件からだったことは疑い得ない。

会ったのも、手紙を書いたのも、たった一度きりの女性を主人公の婚約者として描くとは、気の早い話だとも思われようが、それまで婚約、結婚を現実的なプログラムとして考えたことはなかったカフカにとって作品はむしろ、「自分が婚約すれば、作家としての自分はいったいどうなるだろう」という思考実験に他ならなかった。だとすれば、「婚約者は話のなかで友人との関係、だから共通なもの（＝「書くこと」）への関係を通じてのみ生きている」というカフカの自注はけっして不可解なものではない。この自注は、結婚してもなお「書くこと」は可能だろうか、というカフカの自問と同義であるに違いない。しかしこのことを説得的に展開するには、まだ迂回が必要である。

#### V) ロシアの友人の帰郷

ゲオルクは「明らかに道を誤った」ロシアの友人に、故郷に帰って来いと勧めたい気がないではない。しかし彼を気遣うことは、「労われれば労わるほど、傷つける」結果になることを知っている。帰郷を勧めることは、「彼のこれまでの試みが失敗であった」(D 44) ことを宣告してしまうことになる。このような配慮は、多くのカフカ解釈者によって、ゲオルクの悪意に満ちた悪賢さのように裏目に解釈されてきた。しかし「ロシアの友人」が帰郷するとは、それがカフカの「書くこと」の隠喩として読む限り、作家としての挫折、作家活動の断念と放棄以外を意味しない。これは第一にカフカにとって屈辱であった。「私が今夕方に自分の近親者たちのところへ帰るとすれば、私は自分を喜ばすようなものをなにひとつ書けなかつたので、彼らにとっては、私自身にとってそうである以上に、よそよそしく、軽蔑すべき、役立たずな人間には思えはしないだろう。これらすべてはもちろん私の感情によってであるに過ぎない。」(T 359) カフカは良いものが書けなかつたときの屈辱感をこのように描いている。ましてや作家として究極的な挫折がもたらす屈辱感はいかばかりであったろう。それに加えて「書くことが私の唯一の内的な存在可能性」(F 367) と感じていたカフカにとって「帰郷」は不可能であった。ゲオルクはだから「ロシアの友人」を今のままにしておくこと、自分の婚約のいわば「勢力範囲」

から保護したいという気持ちに駆られている。これはけっして友人への裏切りとして解釈されるべき筋合いのものではない。

初めはうまくいっていた「ロシアの友人」の商売はますます稀になってきた帰郷の際に嘆いているように、ずっと以前から停滞に陥っているようである。このような物語の展開には、当時のカフカの文学的な不振が反映されている。一九一〇年一月五日の『日記』に「もうほとんど一年以上続いている状態」について考察している。「私はまるで石でできていて、自分自身の墓標でもあるかようだ。そこには懐疑や信念、愛や嫌悪、勇気や不安の余地が、一般的にも、個別の点でも一切なく、おぼろげな希望は生きてはいるが、それは墓標に書かれた銘以上のものではない。私が書くどの言葉もほかの言葉にマッチせず、子音はお互いに擦れ合ってプリキのような音をたて、母音はしれに合せて博覧会の黒人のように歌っている。」(T 130) この状態は一九一〇年初頭から始まったとすれば、『判決』が書かれた一九一二年の九月下旬から見れば、ほぼ三年続いたことになる。作品ではロシアの友人が、もう三年以上も故郷に帰っていないことになっているのは、そのためである。

カフカはまた彼の書く能力を「幽霊」のようだと書いている。「私は自分の書く能力をまったく手中に収めてはいません。それは幽霊のように行ったり来たりするのです。」(F 556) カフカが『判決』をヤノホに「一夜の幽霊」(J 54)と呼んだことはよく知られているが、フランス語の幽霊<revenant (再び帰って来たもの)>が示すように、あの世から「帰ってきたもの」である。ロシアの友人の帰郷がだんだん稀になってきたことは、書く能力の訪れが一九一〇年来稀になってきたことと照応している。

ロシアの友人がゲオルクになぜ故郷に帰れないかを、「ロシアの政情不安」のせいにして説明している。「政情不安は零細な商人がほんのわずかなあいだでも留守にすること」(D 45)を許さないのだという。しかしゲオルクは、これが一時凌ぎの口実に過ぎないことを知っている。何十万というロシア人が悠然と世界を駆け回っているからだ。このような設定に何が秘められているのか？カフカは彼の不安が「書くこと」にその原因があると考えていた。「私の内的な不安定と不安はこの点恐ろしいほどで、ここにおいても書くことが唯一の本来的理由なのです。」(F 412) なぜならこの不安は、カフカの職業、災害保険局の官吏と文学的な使命の間の還元不能な葛藤に起因しているからだ。カフカはフェリーツェに書いている。「あなたと私をめぐる懸念(注、結婚を指す)



は、生活の懸念ですから、ともに生の領域に属し、最終的には役所での仕事と調和できるでしょう、しかし書くことと役所はお互いを締め出してしまいます。」(F412) カフカの結婚をまえにしての不安は、芸術と生活（役所と結婚）が両立不能な要素であることにあった。

ロシアの友人が「政情不安」を口実に帰郷できないとすれば、カフカの二重生活からくる不安が「書くこと」に起因するからである。したがってそれは彼のみの不安であって、それと関係のない何十万というロシア人が悠然と世界を駆け回っていることとは無関係なのである。ロシアの友人の「口実」をゲオルクが見破ったとしても、それは倫理的に問題となる口実ではない。

芸術と生活（役所と結婚）が両立不能ならば、残る選択は芸術を採って、他を捨てるべきなのではないか？ もちろんこの可能性も作品では暗示されている。それは友人がゲオルクに「ロシアへの移住」(D 46) を説得しようとするところだ。しかしこの三年間に「従業員は倍に、売り上げは五倍に」になるほど商売が成功していたゲオルクにとって、ペテルブルクに支店を開いてみても、彼の商売がいま抱えている規模から見れば、「その数字は消え入るほど」であった。ここで暗示されているのは、カフカが文学を専業とする可能性である。カフカは一九一一年にルドルフ・シュタイナーと面会したときこう語っている。「この文学的なものに、そうあらねばならないのですが、私はいま完全に身を捧げることができません。……家族事情を除いても、作品の出来が遅いし、特別な性格のものなので、私は文学では生活できないでしょう。」(T 34) カフカは一九一四年に両親に宛てた手紙で、プラハを捨てベルリンかミュンヘンで職業作家になる計画を打ち明けている。手元にある五千クローネで、収入なしでも二年間は暮らしていける。「この二年間は、私が文学的な仕事をし、私がプラハでは内的な弛緩と外的な妨げのあいだで明晰、充溢、統一性において達成できなかったものを、私自身のなかから生み出すことを可能にしてくれます。」(O 23-4, cf. T 508) しかしこの計画は結局未遂に終わってしまった。ロシアの友人の説得は功を奏しなかったのである。

これまでの分析を少しまとめて見る。ロシアの友人が作家としてのカフカを、ゲオルクが市民としてのカフカを暗示し、友人の帰郷（結婚を選択して作家活動を断念する）も不可能であり、さりとてゲオルクのロシアへの移住（結婚を捨てて職業作家になる）も不可能である、というディレンマに追い詰められた状況の中でフリーダとの婚約が問題になっている。

ゲオルクはだから友人、つまり詩人としての自己を結婚にたいして「そっと」、つまり無関係なままにしておきたい。しかしゲオルクとロシアの友人は、個体カフカの両極を代表する存在だから、結婚がその両者の一方に無関係なままに済むはずがない。ゲオルクがフリーダに「彼は私たちの結婚式に来ないだろう」と言うと、フリーダはゲオルクに要求する。「だって私にはあなたのすべての友人と知り合いになる権利があるわ。」(D 47) ゲオルクは応酬する。「彼は来るかもしれない。……しかし彼は自分が強いられ傷つけられたと感じ、もしかすると私を妬んで、不満に陥り、この不満をけっして解消できないで、独りで帰っていくだろう。独り—これがなんだかきみに分かるかい？」フリーダはこれに対して、決定的な疑問をゲオルクに投げつける。「そんな友人がいらっしやるのだったら、ゲオルク、あなたは婚約なんかすべきじゃなかったのよ。」ここにはカフカが『判決』の初出に「フェリーツェ・F嬢のために」という献辞を加えた動機が凝縮されている。しかしだからといって、例えばポリツァーのように『判決』全体の意味をここに還元してよいということにはならない。彼は『判決』は独身生活を失ってはならないという警告以上に明瞭な教を伝えてはいない」(Politzer 102)と述べている。しかしもしこの作品がこれを言うためだけに書かれたのなら、作品はここで終わってよかったはずである。

カフカの自注が示すように、『判決』では所有と存在の問題が核心にある。それを証明するのは、冒頭に引用したカフカの自注のなかで一番奇怪な文言、「ゲオルクはなにひとつ持っていない」「ゲオルクは父へのまなごししか持っていないので、『判決』は彼にかくも強烈に作用するのだ。」という箇所の本質を明かさねばならない。

## VI) ゲオルク・ベンデマンと友人

カフカは一九一〇年の『日記』で自己のなかの「市民と芸術家」の関係を、「汽船に乗って大洋を旅する人」と「波間の木切れに乗って漂う人」というふたつの形象に代表させている。もちろん前者が後のゲオルクであり、後者がロシアの友人に相当する。

……完成した市民として登場するものは、つまり舳先に水泡を、船尾に航跡を引きながら、つまり周りに多くの効果を引き起こしながら、汽船に乗っ

て大洋を旅する人は、お互いにお互いぶつかりあい、押し合う波間の木切れに乗って漂う人とは、まったく違う。だからといってこの紳士で市民である男に、危険がより少ないわけではないのだ。というのも彼と彼の所有物は、一つではなく、二つであり、その結びつきを打ち砕くものは、彼をも一緒に打ち砕くのである。(T 114)

ここに『判決』を解く重要な鍵が隠されている。ゲオルクは父から継承した会社を経営して、その商売は軌道に乗り、婚約もし、一切は順調に見える。しかし「この紳士で市民である男」は、「木切れに乗って漂う人」(友人)に比べて、「危険がより少ないわけではない」。なぜなら「彼」と「彼の所有物」は、「一つではなく、二つ」であり、その「結びつきを打ち砕くものは、彼をも一緒に打ち砕く」のである。『判決』でゲオルクとロシアの友人の結びつきを打ち砕くものは誰か？それは父である。しかし先を急がないことにしよう。両者の運命の逆転、そこにはどんな秘密が隠されているのか。この暗部を照らす手掛かりは、カフカのマックス・プロート宛ての手紙に明示されている。

私が所有しているすべては、私に敵対している (gegen)。私に敵対しているものはもはや私の所有物ではない。たとえば私の胃が—これはほんの一例だが—私を痛めつけるとすれば、それはもはや私の胃ではなく、私を殴ろうという気になった見知らぬ他人と本質的には区別がつかない何かだ。すべてにわたってそうなのだ。私は私に食い込もうとする切っ先だけでできていて、防ごうと力を入れれば入れるほど、切っ先は食い込んでくる。(BKB 73-4)

この書簡の日付は、プロート版の『書簡集』では一九一九年のものとされていたが、『プロート・カフカ往復書簡集』では、一九一〇年三月二日に訂正された。つまりカフカが『日記』にあの断片を書いた時期とほぼ一致する。自己の所有物であっても、自己に敵対的に作用するものは、もはや自己の所有物とは呼べない、この逆転的命題に『判決』の解釈は懸かっている。「ゲオルクはなにひとつ持っていない」ということは、ゲオルクが法的な所有という意味で「なにひとつ持っていない」という意味ではなく、自己の所有物が自己にとって敵対的に作用するという点にその本質がある。ゲオルクは物語の最初では、友達を「持っている」が、父はロシアの友人と同盟関係を結ぶことによって、それをゲオルクから奪ってしまう。この剥奪はゲオルクをいわば丸腰にしてし

まう。そればかりかこの同盟関係は、ゲオルクに死を宣告するに到るのである。一九一七年の『遺稿集』に次のような断章があるのはよく知られている。

ドイツ語の sein という語は、「そこにある」と「彼のものだ」の両者を意味する。 (N II 122 Nr.46)

彼は所有しているかもしれないが、存在していないという主張に対する彼の答えは、ただ戦慄と心臓の鼓動だけであった。 (N II 121 Nr.37)

所有はない、存在があるだけだ。最後の呼吸を、窒息を要求する存在があるだけだ。 (N II 120 Nr.35)

信仰とは、自分のなかの不壊なるものを解放すること、あるいはもっと正確に言えば、自己を解放すること、あるいはもっと正確に言えば、不壊であること、あるいはもっと正確に言えば、「ある」ことである。(N II 55)

最初の命題は第二と第三の命題の共通前提である。だが第二と第三の命題は相互に差異を示している。「所有しているかもしれないが、存在していない」という主張に対して、「彼」は不安と驚愕で答える。なぜなら彼には「存在していない」という主張のほうが、「所有していない」という主張より耐えがたいのだ。第三の命題は、最初から所有を否定し、存在を肯定しているが、その存在たるや「最後の呼吸を、窒息を要求する存在」なのである。この「存在」は、『判決』の結末に、ゲオルクの溺死に対応している。第四の命題では、「存在」は信仰との関係で肯定的に把握されていて、第二の命題で「存在していない」という主張がなぜ戦慄に値するのかが述べられている。

ではカフカにおいて、「所有が非所有へと逆転する」過程を解発するのはいったい何か？すでにⅢ章でカフカにとって「芸術と生活（役所と結婚）が両立不能な要素」であることは指摘しておいた。前述のルドルフ・シュタイナーとの会見でカフカは市民としての自己と作家としての自己との間に横たわる矛盾を「一方におけるどんなにささやかな幸福でさえ、他方における大きな不幸となる」と定式化している。

ところでこれら二つの職業（作家と官吏）はお互いにけっして我慢しあわないし、共通の幸福を許容することはありません。一方におけるどんなに

ささやかな幸福でさえ、他方における大きな不幸となります。私がある晚いいものを書く、翌日役所で体が燃えて、なにひとつ完成することが出来ません。……役所で外面的に私の義務を満たせば、私の内的な義務は満たされず、満たされなかった内的な義務は不幸となって、私のなかから出て行こうとしません。(T 35)

ふたつの職業が折り合わないことは、一方が他方の敵となることであり、この逆転がすなわち「所有」を「非所有」に変換してしまう当のものなのだ。そしてこのとき「私は私に食い込もうとする切っ先だけでできていて、防ごうと力を入れれば入れるほど、切っ先は食い込んでくる (BKB 73-4)」という状態を生むのである。この自虐的な状態は、カフカが「書かずにはいられない強迫」に突き動かされる状態でもある。一九一一年九月一七日のマックス・ブロート宛ての手紙でカフカは、「どうしても書かずにはいられないという強迫」がずっと以前はかなり持続的に (注一『ある闘いの記述』を書いていた一九〇四〜八年頃のことか) 感じられたし、またストレーザ (注一九一一年九月七日にカフカはブロートと旅行で立ち寄った) で一瞬自分の内部に感じられたが、ストレーザでは「自分を拳のように、その内側では爪が肉に食い込んでいる拳のように感じた」(Br 90) と述べている。自分の肉に食いこむ爪のイメージは、先ほどの「切っ先」と同じく自虐の隠喩である。カフカはこの自己再帰的な関係を、さまざまに変奏している。例えば彼の「独身者」もそうである。「彼の本質は自殺者の本質であり、それは自分の肉のための菌と自分の菌のための肉しか持っていない」(T 113) ここで再帰的な自己参照性は明示的に自殺と関係付けられている。作品の最後で自殺するゲオルクの顔がここでははっきりと見えてくる。

私たちはこれまでゲオルクとロシアの友人の关系到専念して、ゲオルクと父の関係を不問に付してきた。ゲオルクと父の関係を主題化せずには、これ以上の問題の深化は望めないであろう。

## Ⅶ) ゲオルクと父

ゲオルクは友人に自分の婚約を手短に知らせた手紙を持って、父の部屋に行く。その手紙にゲオルクは、友人が「ごくありきたりな友人 (ゲオルク)」の代わりに「ひとりの幸福な友人」を持つことになるだろう、と書き、またロシアの

友人に「万障繰り合わせて」彼の結婚式に出席するよう招待している。ゲオルクは彼を故郷に呼び返すことを決意したのである。彼は父の部屋に行くのは数ヶ月振りである。しかし彼は常に父と店で会っていたし、食堂で昼も一緒に食べているのだから、その必要がなかったのだ。廊下を渡って部屋に入ると、ゲオルクは「ひどく暗いのに驚く。」(D 50) またゲオルクは、父が「相変わらず大男」だと感じ、「店にいるときとまったく違うな」と驚く。この部屋の「暗さ」と父の変った様子は、すでに不気味な前触れである。

ゲオルクは父に友人に婚約を告げる手紙を書いたことを切り出す。最初は友人に黙っていようと思ったのだが、「私の幸せな結婚は、彼にとっても幸せであるはずだ」と思い直して、ためらいをやめ、「でも手紙を投函する前に、それをあなたに言おうと思ったのです。」しかしよくよく考えてみると、これは異常な行為である。たかが友人に結婚を知らせる位のことではいちいち自分の父のコンセンサスをうる必要があるとしたら、それは息子がよほど父に依存しているか、父が専制的な場合に限るであろう。しかしゲオルクは店を立派に切り盛りし、そう依存的な息子には見えないし、ゲオルクの父は、店を息子に譲っており、もはや専制的でありうる存在ではなくなっている。このような「承認の要求」は、ゲオルクと友人の特殊な関係、またゲオルクと父の通常ならぬ関係を暗示している。

父はゲオルクに先ず息子の行為を褒める。そのことで私に相談に来たのは、「おまえの名誉になることだ」と。父はこう続ける。「しかしそれはなんでもないことだ、もしおまえが私に真実をすっかり言うのであれば、それよりもっと悪い」と。父がゲオルクに求めるのは「全面的な真実」である。ミレナへの手紙にカフカはこう書いている。

ミレナ、どうか私に正直さを要求なさらないでください。私以上に私からそれを要求しうるものはいないので。しかし私から多くのことが洩れていきます。もしかすると何もかもが。しかしこの狩猟(注一真実を求める狩猟)で私を勇気付けてくれるものではありません。そうなると反対にもう一步も進めず、突然一切が嘘になり、追跡されていたものが、狩猟者を絞め殺してしまいます。(M 41)

カフカはここで父とゲオルクの二役を演じている。ゲオルクの父は「店ではかなりのことが私から洩れていく、しかし隠されているのではないかもしれない」

と言う。『判決』では父のほう狩人の役割を果たしている。カフカ自分が独りで演じているものを、父とゲオルクに分割して演じさせる。しかし「突然一切が嘘に」になって、「絞め殺される」役割はゲオルクの方に振られるのだ。『判決』の父は突然問題の核心に迫っていく。「ゲオルク、私を騙さないでくれ、おまえは本当にペテルブルクに友人がいるのかね？」(D 52) ゲオルクはうろたえて、父が健康を害していると考え、ふたつの提案をする。店が父の健康を損なうなら、店をたたむこと、自分の明るい部屋と父の暗い部屋を交換すること、を。しかし父はそれには取り合わず、友人の存在を否定する。「おまえにはペテルブルクに友人などいはいないのだ。」ゲオルクは父に三年前の友人の訪問の際のエピソードなどを話して、父の記憶を呼び戻そうとする。「私はあなたが彼を特に好きではなかったことを想いだします。彼が私の部屋にちょうど坐っているのに、少なくとも二度彼はいないとあなたに言いました。私は彼に対するあなたの嫌悪をまったくよく理解できます。私の友人には独自なところがりましたからね。」(D 54) (友人の存在の問題は後に考察する。)

友人がカフカの作家としての自己であるという仮定は、父の友人への嫌悪と矛盾しない。「父への手紙」でカフカは、父ヘルマンの文学への嫌悪をこう語っている。「私の書くことに対してあなたが抱かれた嫌悪は、私には例外的に歓迎すべきものでした。」(N II 192) フランツはそこに父の「勝手にしろ」を読み取ったのである。友人の「独自性」関しては、カフカは『遺稿』に長い自己分析を展開し、彼の文学的愛好という独自性が家族によっていかに禁圧されたかを語っている。カフカが一七歳のころ、深夜まで読みふける読書を両親に禁止された体験をこう語っている。

肝心なことは、長時間の読書という私の独自性が、こうして受けた有罪判決を自分の手段でもって、義務の等閑という隠されていた別の独自性にまで及ぼして、この上ない抑鬱的な結果に到ったのである。それは誰かが鞭を、ただ警告のために触れるだけで、痛みを与えようというのではないのに、彼のほうは編み細工の先っぽを、ささらにして、鞭の先端の一本一本を自分に突き刺し、自分の計画で自らの内部を刺したり、掻き塗ったりするのである。相手の手は相変わらず鞭の柄を握ったままなのに。……

(N II 10)

ここでは抑圧者の単なる警告、単に罰の兆しでしかないものを、被抑圧者が罰

の予定された全容において自らに代理執行してしまうという自虐的な構図が語られている。彼の行為は他者の処罰意思の実践的延長になってしまう。ゲオルクはまさにそのように行動する。父が下した溺死の刑の宣告をそのまま彼は実践してしまうのである。ここでもカフカはゲオルクとロシアの友人の二重の役割を演じていると言える。独自性は、『判決』では、友人に、つまり作家としてのカフカに書き込まれている。しかし処罰を実行するのは市民としてのカフカ、ゲオルクである。

ゲオルクと父の関係は、さらに展開される。ゲオルクは父を労わって、下着を脱がせ、ベッドに連れて行く。そのとき父はゲオルクの時計の鎖をつかんで離さない。(この父の行動の象徴性は後に触れる。)父はベッドで掛け布団を自分からかけ、ゲオルクに尋ねる、「私はじゅうぶん包まっているかね？」ゲオルクが「充分包まっていますよ」と言うと、父は「そうじゃないぞ」と言って、掛け布団を撥ね退け、ベッドの上に起ちあがる。ここで父の友人に対する態度は一変する。「たしかに俺はおまえの友人をよく知っている。彼は俺の心になつた息子でもあろうに。だからこそおまえは彼を長年にわたって騙し続けてきたのだ。俺があいつのために泣かなかつたとも思っているのか？」父はさらに「俺は当地での彼(ロシアの友人)の代理人だ」とさえいうのである。

この逆転に読者は啞然とせざるをえない。この矛盾を解くには多くの考察が必要である。私たちは、ロシアの友人が作家としてのカフカだ、という前提に立って論を進めてきたが、作家とはいったい何だろうか？この問題が改めて問われねばならない。しかし紙数の関係で、これは続編に譲るほかはない。この章はこれから分析すべき素材の提示に比重がかかりすぎたが、物語の展開をある程度まとまった形で追わざるをえないので、分析は次章に先送りになった。なお末尾ながら文献の収集に尽力いただいた服部精二氏に心から感謝したい。

(続く)

---

この論文は文部科学省の科学研研究費、課題番13610627「カフカとフロイト」の研究成果として発表されるものである。



文献と略号 (Literaturhinweise und Abkürzungen)

A) Primärliteratur

Kafka, Franz: Schriften, Tagebücher, Briefe. Kritische Ausgabe. Hg. von Jürgen Born, Gerhard Neumann, Malcolm Pasley und Jost Schillemeit. Fischer. 1982ff.

- Br. I Briefe. 1900—1912. Kommentierte Ausgabe in einem Band. 1999.  
D Drucke zu Lebzeiten. 1996.  
N I Nachgelassene Schriften und Fragmente. I 1993.  
N II Nachgelassene Schriften und Fragmente. II 1992.  
P Der Proceß. 1990.  
S Das Schloß. 1982.  
T Tagebücher. 1989.  
V Der Verschollene. Hg. von Jost Schillemeit. 1983.

Ap. Apparatband.

K. Kommentarband.

Gesammelte Werke. Hg. v. Max Brod. Fischer.

- Br. Briefe 1902—1924. Hg. v. Max Brod. Fischer. 1958.  
F Briefe an Felice und andere Korrespondenz aus der Verlobungszeit.  
(Fischer. 1967)  
BKB Max Brod/Franz Kafka, <Eine Freundschaft>. Bd. II, Briefwechsel.  
Hg. V. Malcolm Pasley. Fischer, 1989.

Andere Autoren

- SZ Heidegger, Martin: Sein und Zeit. Max Niemeyer. 1963  
É Lacan, Jacques: Écrits. Édition du Seuil. 1966.  
Sé XI Lacan, Jacques: Le Séminaire de Jacques Lacan. Quatre Concepts  
Fondamentaux de la Psychanalyse. Édition du  
Seuil. 1964.

Freud Freud, Sigmund: Gesammelte Werke in 18 Einzelbänden. Fischer  
1940~1968 (Liz. von Imago Publishing, London)

B) Sekundärliteratur

- Asher, Evelyn W.: Urteil ohne Richter—Psychische Integration oder Charakter—entfaltung im Werk Franz Kafkas. Peter Lang. 1984. S. 31—57
- Bartels, Martin: Der Kampf um den Freund. Die psychologische Sinneinheit in Kafkas Erzählung 《Das Urteil》. In: Deutsche Vierteljahresschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte 56 (1982). S.225—258
- Beharriell, J. Frederick: Kafka, Freud, and 《Das Urteil》. in 《Texte und Kontexte. Studien zur deutschen und vergleichenden Literaturwissenschaft. Festschrift für Norbert Fürst zum 65. Geburtstag.》 Hg. v. Manfred Durzag [u. a.]. 1973. Francke Verlag. S.27—47.
- Bernheimer, Charles: Letters to a Absent Friend. A Structural Reading. In: The Problem of 《The Judgment》. Eleven Approaches to Kafka's Story. Hg. von A.Flores. Gordian Press. (1977) S.146—167.  
(Bernheimer I)
- Bernheimer, Charles: Flaubert und Kafka—Studies in Psychopoetic Structure. Yale University Press. (1982) S.139—188. (Bernheimer II)
- Demmer, Jürgen: Franz Kafka. Der Dichter der Selbstreflexion. Ein Neuansatz zum Verstehen der Dichtung Kafkas, dargestellt an der Erzählung 《Das Urteil》. W. Fink. 1973.
- Falke, Rita: Biographisch—literarische Hintergründe von Kafkas 《Urteil》. In: Germanische—Romanische Monatschrift 41 (1960) S.164—180.
- Flores, Kate: 《The Judgment》 In: Franz Kafka Today. Hg. von A. Flores und H. Swander. The University of Wisconsin Press. 1964. S.5—24.
- Hiebel, Hans Helmut: Die Zeichen des Gesetzes. Recht und Macht bei Franz Kafka. Wilhelm Fink. 1983. S.115—123.
- Jahraus, Oliver [u.a.] (Hg.): Kafkas 《Urteil》 und die Literaturtheorie. Zehn Modell-Analysen. Reclam. 2002.
- Gray, Richard T.: Das Urteil—Unheimliches Erzählen und die Unheimlichkeit des bürgerlichen Subjekts. In: Interpretationen—Franz Kafka. Romane und Erzählungen. (Hg.) von Michel Müller. Reclam. 1994. S.11—41.
- Hartwich, Wolf—Daniel: Böser Trieb, Märtyrer und Sündenbock—Religiöse

Metaphorik in Franz Kafkas *«Urteil»*. In: Deutsche Vierteljahresschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte 67 (1993). S.521–540

- Kaus, J. Rainer: Erzählte Psychoanalyse bei Franz Kafka—Eine Deutung von Kafkas Erzählung *«Das Urteil»*. Winter. 1998.
- Neumann, Gerhard: Franz Kafka. *«Das Urteil»*. Text, Materialien, Kommentar. Hanser. 1981.
- Marson, E. L.: Franz Kafka's 'Das Urteil'. Journal of the Australasian Universities Language and Literature Association. (University of North Queensland) 16 (1961) S.167–178.
- Politzer, Heinz: Franz Kafka—Der Künstler. Fischer. 1965. S.87–104
- Ryan, Lawrence: *«Zum letztenmal Psychologie!»* Zur psychologische Deutbarkeit der Weke Franz Kafkas. In *«Psychologie in der Literaturwissenschaft»*. Lothar Stiehm Verl. 1971. S.157–173.
- Seidler, Ingo: Das Urteil: *«Freud natürlich?»*. Zum Problem der Multivalenz bei Kafka. In *«Psychologie in der Literaturwissenschaft»*. Lothar Stiehm Verl. 1971. S.174–190.
- Schlingmann, Carsten: Literaturwissen—Franz Kafka. Reclam. 1995. S.68–80
- Sokel, Walter H.: Franz Kafka—Tragik und Ironie. Langen & Müller. 1964. (Sokel I)
- Sokel, Walter H.: Perspective and Truth in *«The Judgment»* In: The Problem of *«The Judgment»*. Eleven Approaches to Kafka's Story. Hg. von A.Flores. Gordian Press. (1977) S.193–237 (Sokel II)
- Steffen, Hans: Kafkas *«Das Urteil: Drei Lebensmodelle und ihre Verurteilung*. In *«Jenseits der Gleichnisse—Kafka und sein Werk»*. Jahrbuch für Internationale Germanistik. Reihe A. Band 17. Peter Lang. 1983. S.97–127
- Speirs, Ronald: *«Das Urteil»* oder die Macht der Schwäche. In: Franz Kafka. Text+Kritik. Sonedrband. Edition Text+Kritik. 1994. S.93–108.
- Tiefenbrun, Ruth: Moment of Toment. An Interpretation of Franz Kafka's Short Stories. Southern Illinois University Press. 1973. S.79–110
- White, John: Franz Kafka's 'Das Urteil' — An Interpretation. In: Deutsche Vierteljahresschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte.

38 (1964). S.208—229.